

# 集合操作表現と間接疑問節

福岡大学 江口 正

## 1 はじめに

本発表で示すこと：

(1) 本発表で示すこと：

- a. 「不定的同格構文」について確認
- b. 選択候補導入表現について観察
- c. 集合操作表現について確認
- d. 集合操作表現と間接疑問節との関係について観察

(2) 本発表で問題にすること：

名詞句並列タイプの不定的同格構文形成要素と間接疑問節とがどう異なっているか

(名詞と節とがどう異なるか)

## 2 不定的同格構文とは

「太郎とか次郎とか」「太郎やら次郎やら」「太郎や次郎など」といった表現が名詞修飾マーカーなしに同じ集合を指す名詞と同格的に共起するもの（江口（1998））。(以下、不定的同格要素を[]で、同格的に表れているホスト名詞句を下線で示す)

(3) [太郎とか次郎とか／太郎やら次郎やら／太郎や次郎など]、学生が来ていた。

これらは、以下のような形で「要素」と「属性」から「集合」を規定する表現である。

(4) [不定的同格要素：集合の「要素」]+ ホスト名詞句：集合の「属性」

これらの要素は、単独で格助詞等を付ければ名詞句になる。

(5) [太郎とか次郎とか／太郎やら次郎やら／太郎や次郎など]が来ていた<sup>1</sup>。

一方、格助詞なしで単独で生起するとやや不自然になる。

(6) ?～\* [太郎とか次郎とか／太郎やら次郎やら／太郎や次郎など]、来ていた<sup>2</sup>。

以下のような並列表現は不定的同格構文でやや適格性が落ちる。

(7) a. ?[太郎か次郎か]、学生が来ていた。

b. [太郎か誰か]、学生が来ていた。

(8) ?[太郎と次郎と]、学生が来ていた。

(6)a・(7)が適格と感じられる場合には、「太郎か次郎か、あるいはほかのだれか」「太郎と次郎と、それから他にも…」という含みを感じられるように思われる。「か」・「と」による並列は通常、それ以外の要素の存在が関与しないが、こういった解釈ではそういう要素を仮定していることになる。つまり、「とか／やら」あるいは「太郎か誰か」「太郎、次郎など」と同様の「例示」の解釈があって初めて適格になると考えられる。

---

<sup>1</sup> 「太郎、次郎、三郎と、学生が来ていた」のような「と」による列挙も不定的同格構文の一種と考えているが、引用句専用の助詞であるため、格助詞を付けて「\*太郎、次郎、三郎とが来ていた」とはできない。同じく引用を表せる「太郎だの次郎だの」は名詞句としての用法があるため、格助詞を付けて「太郎だの次郎だのが来ていた」とできる。

<sup>2</sup> 金水（2014）では「田中か山田か、呼んできて」が適格と判断されているが、単純な肯定文にすると「?田中か山田か、呼んできた」と適格性が落ちる。これは依頼文などのモダリティが格助詞省略と関係しているのか、並列表現のモダリティ制限と関係しているのかははっきりしないが、文末モダリティと何らかの関係があると思われる。

### 3 選択候補導入表現について

「か」や「と」による並列句は上記のように不定的同格構文になじまないが、自然になる場合がある。「選択の候補」を導入する場合である。

(9) a. [コーヒーか紅茶か]、どちらか好きなほうをお飲みください。

b. [コーヒーと紅茶と]、どちらか好きなほうをお飲みください。

これらは「その他の要素」の存在は必要がない代わりに、「どちらか」か「好きなほうを」のどちらかが必要である。

(10) a \* [コーヒーか紅茶か／コーヒーとお茶と]、お飲みください。

b [コーヒーか紅茶か／コーヒーとお茶と]、どちらかお飲みください。

c [コーヒーか紅茶か／コーヒーとお茶と]、好きなほうをお飲みください。

さらにホストを変えると適格性が落ちる場合がある。

(11) a (?) [コーヒーか紅茶か]、飲み物をお飲みください。

b ? [コーヒーと紅茶と]、飲み物をお飲みください。

注目すべきは、(9)・(10)のホスト名詞句が「選択」を明示するものであるということである。これは、金水 (2014) で示された以下のような例と関係すると思われる。

(12) [田中と山田と]、両人を連れてきて。

「どちらか」「お好きなほう」は選択を、「兩人」は全称的であることを直接表す名詞であり、前に見た不定的同格構文のような単純な「属性」を表すものではない。「か／と」のような「例示的」な解釈を基本的には持たない総称的な並列句はこういった「集合の操作方法を明示する名詞句」をホストに選んで不定的同格構文を形成するという性質があるように思われる。

#### 4 集合操作表現について

不定的同格構文に部分的に似たものとして、江口（2000）・（2006）・（2013）では「集合操作表現」というものを提案している。これには2つのタイプがある。（以下では集合操作表現を { } で示す）

##### (13) 集合定義タイプ

{太郎をはじめ／太郎だけでなく／太郎に限らず／太郎のほか／太郎に加え}、  
[次郎や三郎など]、学生が来ていた。

##### (14) 集合操作タイプ

- a. 学生は {太郎に限って／太郎に} 来ていた。
- b. 学生は {太郎のほか} 来ていた。((13)の「ほか」と異なり、「除外」)

これらにはいくつかの異なった文法的特徴がある。第一に集合定義タイプにはホスト名詞句がなければならないが、集合操作タイプは不要である。

- (15) a. \* {太郎をはじめ／太郎だけでなく／太郎に限らず／太郎のほか／太郎に加え}、来ていた。(集合定義タイプ)
- b. {太郎に限って／太郎を除き} 来ていた。(集合操作タイプ)

第二に、集合操作タイプは、ホスト名詞に集合内の同列にならぶ「要素」を選べない。

(16) a. {太郎をはじめ／太郎だけでなく／太郎に限らず／太郎のほか／太郎に加え}、  
          次郎や三郎が来ていた。(定義タイプ)

b. \*次郎や三郎は、{太郎に限って／太郎を除き} 来ていた。(操作タイプ)

集合操作タイプは、分布の上から見ると遊離数量詞や取り立て詞句と類似している。

(17) a. (学生は) 3人／太郎も／太郎だけ 来ていた。

b. \*次郎や三郎などは 3人／太郎も／太郎だけ 来ていた。

## 5 間接疑問節の特殊性

江口(1998)では、間接疑問節も不定的同格構文の要素としていた。(山泉 (2008)・Tomioaka (2009) なども参照)

(18) [誰が来ていたか]、参加者がわからない。

しかし間接疑問節は、名詞句並列タイプの不定的同格構文と異なる点がみられる。

第一点。(7) でみたように、「か」による並列句はそのままでは不定的同格構文としてすわりが悪いが、「か」で並べた選択式の間接疑問節は問題ない。

(19) a. ?[太郎か次郎か]、来ていた。

b. ?[太郎か次郎か]、学生が来ていた。(= (7a))

(20) a. [太郎が来たか、次郎が来たか]、わからない。

b. [太郎が来たか、次郎が来たか]、参加者がわからない。

第二点。集合を操作するタイプの句は同列の「要素」と共起することはできないが、間接疑問節とならできる。

(21) a. \*次郎や三郎は、{太郎に限って／太郎を除き} 来ていた。

b. [誰が来ていたか]、{太郎に限って／太郎を除き}、わかった。

これは、間接疑問節が節であることと関係しているように思われる。個体と並列要素のは個体であるが、間接疑問節が表す「要素」のひとつひとつは命題内容であるからであろう。

## 6 まとめ

本発表では、不定的同格構文の構成要素としての間接疑問節が、名詞並列表現とどのように異なっているのか、いくつかの現象を通して考察を加えた。

### 参考文献

江口正 (1998) 「日本語の間接疑問節の文法的位置付けについて—不定的同格要素として—」

『九大言語学研究室報告』 19 pp.5-24 九州大学言語学研究室

江口正 (2000) 「『ほか』の2用法について」愛知県立大学外国語学部紀要 第32号(言語・

文学編) pp.291-310

江口正 (2006) 「集合を設定する「ウチ」の分布特性」藤田保幸(編)『複合辞研究の現在』

和泉書院 pp.235-247

江口正 (2013) 「集合操作表現の文法的性質」藤田保幸(編)『形式語研究論集』和泉書院

pp.155-175

江口正 (2014) 「主節の名詞句と関係づけられる従属節のタイプ」益岡ほか編 (2014) 所収 pp. 143-167

金水敏 (2014) 「疑問文の意味と構造」国立国語研究所プロジェクト「日本語疑問文の通時的・対照言語学的研究」研究会発表資料

金水敏 (2015) 「『変項名詞句』の意味解釈について」『日中言語研究と日本語教育』 8 pp. 1-11

益岡隆志・大島資生・橋本修・堀江薫・前田直子・丸山岳彦編 (2014) 『日本語複文構文の研究』 ひつじ書房

Tomioka, Satoshi (2009) "Japanese Embedded Questions Are Nominal: Evidence from QVE" Paper presented at Sixth Workshop on Altaic Formal Linguistics, Nagoya University.

山泉実 (2008) 「間接疑問と潜伏疑問が共起する構文—その意味論・談話語用論・機能的統語論」 森雄一他編『ことばのダイナミズム』 pp. 223-239 くろしお出版